



The Royal Photographic Society

Patron: Her Majesty The Queen. Incorporated by Royal Charter

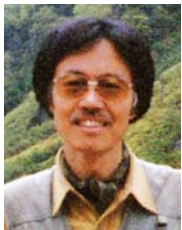
NEWS LETTER

第7号 2006/3/30

発行所 英国王立写真協会・日本支部
〒100-0014
東京都千代田区永田町2-17-5
ローレル永田町510
Tel 03-5251-4311
Fax 03-5251-4501
E-mail yoshi-rpsj@mm.em.net.jp
発行人 藤井悦男 編集人 豊田芳州

R P Sの精神と認定資格

.....支部活性化に向けて



川村賢一 ARPS
(かわむらけんいち)

はじめに

支部設立から10年目を迎える今年、今後の支部のあり方など、もう一度初心に返り、皆さんとともに、さらなる活性化を考えていきたいと思ひます。

ここで、R P Sを名乗り、今後対外活動をしていく上には、改めて「R P Sの精神」や「正会員」についても、確認しておいた方がよいのではないかと感じ、英国での経験(25年以上前ですが...)を交え、私なりの解釈を述べたいと思ひます。

R P Sの精神

R P Sは、写真家だけでなく、写真に関わる研究者や技術者などをも包括的に網羅する、他に類を見ない団体です。

ロンドンでのR S P展で、R P Sについて聞いたときのことは大変印象的でした。

R P Sの場合、「その人が誰であるかは全く関知しない。プロアマはもとより、人種も国籍も身分も問わない。どんな作品であるかがすべてだ。」と誇らしげに語っていました。

これほどの規模で、こんなに懐の広い団体があるのでしょうか。しかも未だに階級意識の強い英国で、もっとも歴史と伝統のある団体ですから驚きです。

これがB I P P(英国プロ写真家協会)との大きな違いであり、これこそ私が感動し、入会を決意させたことに他なりません。

R P Sの趣旨と会員資格

会員の高木祥光さんから伺った話では、高木さんの時代('60年代)には、会員になるには、はじめから審査があったとのことですが、私の時代('70年代後半)は簡単で、すぐに会員になりました。したがって、高木さんの時代と、私が入会した時点では、本部の体制が大きく変わっているようです。

現在のR P Sの趣旨としては、「写真および写真技術を通じて、写真文化の向上と、人々の交流を図る」ということを目指し、世界中に広く門戸を開いています。写真におおいに興味があり、R P Sの趣旨に賛同することさえ示せば、実力の如何を問わず「誰でも」入会し、メンバーになることができます。

ただし、これは私の理解するところでは、日本でいう「正会員」ではないと思ひます。R P Sの一般メンバーは、日本流に言えば「会友?」とでも言うべきものではないでしょうか。これまで、日本支部会員について、しばしば「正会員」という呼び方で書かれることがありましたが、R P Sの趣旨および構成からするとちょっと違和感を感じています。

R P Sにおいては、写真展のネームプレートであれ郵便物であれ、会員の名前には必ずタイトル(distinctionの称号)がつけられます。これが、R P Sの流儀だと思ひます。

R P Sの認定資格と会員構成

R P Sでは、distinctionの認定を受けることを推奨しており、所定の要件に沿った作品や、研究成果を年に何度かの審査会に提出し、タイトル(称号)の認定を受けます。

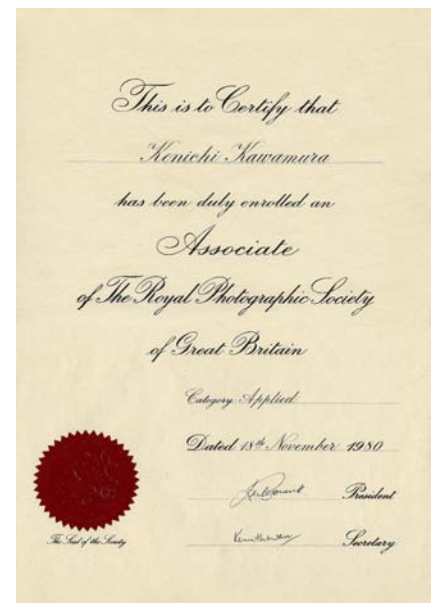
私をはじめに受けた distinctionは、L R P S(Licentiate)ですが、これがいわば「準会員」ではないでしょうか。これは写真の基礎的な技

術と表現力の認定であり、写真の専門的教育を受け、優秀な成績を修めた卒業生の場合は、無条件でL R P Sを獲得できます。

R P Sの構成は、大相撲に少々似ているのですが、L R P Sは幕下に相当し、この場合、写真学校の卒業生は、ちょうど学生横綱の幕下付け出しのような感じですが、その上のA R P S(assciateship)以上が、「シニアメンバー」として位置づけられており、これが「正会員」に相当するもので、大相撲での関取に当たります。さらに上席正会員とでも呼ぶべき、F R P S(fellowship)がありますが、これいくとA R P Sはさしずめ十両で、F R P Sが幕内ということになります。

また、写真界に対し際立った貢献や、特別の業績を上げたものに対し授与される名誉のタイトルとして、Honourable F R P Sがありますが、正にこれは大関、横綱です。

英国では、写真教室など教育プログラムも、シニアメンバーが中心となって行われています。



A R P S 認定書

R P S の評価基準

前述の distinctions 審査会では、ときおり公開審査もしていると聞き、早速傍聴券を手に入れて見に行きました。その審査課程を見ることで、R P S の写真や認定基準に対する考え方が非常によく分かりました。

明確になった考え方のひとつに、ひとつひとつの作品がどんなに優れていても、ポートフォリオ全体を通して、その作者が「何を表現し、何を伝えたいのか」が明確でなければ、審査に通らないということです。応募者の中には、フォトコン荒らし的な人もおりましたが、数々の受賞作品と分厚い受賞経歴書を提出したにもかかわらず、合格しませんでした。

また、個々の写真だけでなく、プレゼンテーションの善し悪しも評価されます。これはたとえプロの写真家であっても同じです。

実際に、プロであっても F R P S に合格できない人も多く、反対にアマであっても F R P S として中心的に活躍している人も少なくありません。

また、上位のタイトルになるほど、その作者ならではの表現や考え方が、写真を通して見る人に伝わってくるものが強く要求されます。とくに F R P S は、確かな技術や表現力の上に、その人ならではの独創性が問われます。ちなみに、ある勉強会で、「私の写真は F R P S のレベルに達しているか知りたいのですが...。」という質問者に対し、「そういう質問がでるうちは、まだその域に達していないと思って間違いありません。」というのが回答でした。

R P S の名に恥じない活動

R P S タイトルを保持すること、R P S の名に恥じない作品を発表することは、心理的に密接な関係にあると思います。対外的に発表する場合、作品を見る側からもそれなりの見方をされます。

私の場合、A R P S の審査には4回目の挑戦でようやく通ったこともあり、その重みを十分感じています。その分、作品を発表する場合は、プレッシャーを感じながらも、タイトルにふさわしい品質であるかどうか、常に自問自答しています。

これまでの写真展来場者からの感想の中に、いくつかの厳しい指摘も寄せられています。

これは正に R P S という大看板への期待があるからに他なりません。また、本部の写真展同様に、高い水準を保つ

三十年近く前、英国パースの R P S 本部にて認定書の授与を受ける



ために、いずれ出展作品の選別も必要ではないかと思えます。本部の写真展の場合、選ばれること自体名誉なことで、写真経歴の対象ともなるものです。

将来的には、支部会員相互の事前審査も検討課題です。一定の水準を保つ努力は必要で、長い目で見れば写真展に出品できること自体が、大きな励みになるはずで、今後の発展のためには、安易な紳士サロンで終わるのではなく、高いハードルを自ら課すことも重要ではないでしょうか。

次の目標は公式認定への挑戦

現在の日本支部会員の皆様は、相当数がプロの作家であり、それ以外の方についても、私がとやかく言える立場にないことは明白ですが、会員となるための審査基準はないのですから、対外的には正式の認定証書をもって「R P S 正会員」とすべきだと思います。

今後さらに支部会員を増やすような方向にするのであれば、なおいっそう R P S の趣旨にかなった審査による公式認定、本部による権威付け (distinctions) は必要だと思います。他の写真クラブではなく、これが正に R P S です。

現在、機関誌購読だけの受動的な繋がりの方も、これにより実質的に本部との明確な繋がりが持て、タイトルを受けて名実ともに R P S 会員と言えると思います。できるだけ多くの会員が、タイトル保持者となれば、さらに多くの人にとって励みになるでしょう。とくにアマチュアの場合、技術と表現力について、一定のお墨付きを受けることであり、大変大きな目標となり、励みにもなります。また、「正式の認定証書」を受け取るのもなかなか感動ものです。

いずれ F R P S にチャレンジすることが私の目標のひとつですが、是非、支部活動の次の目標としては、「R P S タイトルに全員で挑戦！」ではないでしょうか。これにより R P S 内での日本支部の存在感を高め、支部自らをも向上することにつながるのではないかと期待しています。

旬のものへの写欲

...巨大タンカー進水式、

そして大画面オーロラビジョン...

宮田 隆

(みやたたかし 長崎県雲仙市在住)

このたび、歴史と伝統の英国王室写真協会日本支部への入会をご許可頂き、誠に光栄であり、過分なる名誉であります。これもひとえに同会の理事・事務局長のご要職にあられる三宅善夫先生のご尽力の賜物であり、同時に会員各位のご支援に心から感謝と御礼を申し上げます。現在、九州の最西端、長崎県雲仙市小浜温泉街に昨年、43年間の三菱電機での内外の勤めを終え、東京から移住し田舎生活に浸っております。皆様に直接拝顔の上、ご挨拶申し上げるべきところ、この紙面をお借りしてのご挨拶をお許し願います。





ヨセミテ公園から見たハーフムーン渓谷



グランドキャニオンの暁光

三宅先主との出会い、
そしてそのエネルギーと写欲に
魅せられて

先生との出会いは神田祭りでの例祭の総指揮者神田本町の中村建夫会長同席のもと、神田“章太亭”での祭り談義に遡る。美人女将の手酌の華を添えて、先生のくめども尽きぬ話題に盛り上がり、即、“江戸のかたきを長崎で！”と長崎行実現、祭りの所作にも造詣深い中村会長ご夫妻は日本最西端の五島列島経由で長崎くんち大祭詣出と江戸御仁の行動は早い。翌年は築地・東京青果の常務武田ご夫妻共々博多祇園山笠見学と、交友2年間でたちまち日本3大祭りと地場の食を共に堪能する。長崎では大祭本番当日、早朝から先生の目は輝き、本殿への93段の石の長坂もなんのその、カメラワークは鬼気迫る

全魂投入激写。ついに一昨年市民待望の写真集“熱撮長崎くんち・三宅善夫撮影”（長崎文献社）を出版、いまなお市民に、観光客に好評である。昨年10月の“長崎くんち”には三宅先生の同期“十亥会”の数組のご夫妻を交えて20人の紳士を率いて、ハウステンボス経由、維新の土坂本龍馬の抜刀の柱傷が遺る老舗料亭“花月”で長崎のしっぽく料理を堪能され、翌日諏訪神社の棧敷で360年の伝統行事長崎くんちの豪華な舞に“もってこーい!!、もってこーい!!!”（アンコール）を連呼される、あの色香漂う童顔はいまや長崎の街では、昼は長崎の観光大使役、夜は紫色の銅座界隈の顔役でもある。先生にはいつまでも写欲旺盛で、本事務局でのご活躍と先生のかねてからの念願である英国王立写真協会の本部英国での“日本の祭り”の写真展をぜひ実現



英国王立ASCOT競馬(上)と三菱電機杯を授与する筆者

頂き、その節は皆様共々お供させて頂きたいものであります。

私の写真雑感：巨大タンカーの豪華な進水式
そして網膜に焼きつく原爆直下

長崎生まれの僕には、日本の写真の元祖上野彦馬の銅像が立つ公園で遊んだ幼い頃の写真の思い出が彷彿としてくる。父親がああ戦艦武蔵を建造した三菱長崎の造船マンだった為に、巨大なタンカーの進水式によく連れて行ってくれた。見上げる船体の大きかったこと、華やかな式典、船首のシャンペーンと豪華なクス玉が割れて舞う花びら、父が買ってくれた写真機のシャッターを何度押し忘れたことか、そして幼い子供の見上げるあまりにも巨大な船体に気を取られ、何台、海にカメラを落としたことか、その都度、興奮の夕餉の食卓で何度父に叱られたことか。でもその父も今はいない。造船マンとしての誇らしげな父の精霊船(しょうろうぶね)は藁で作った、煙突から煙が出る巨大タンカーのミニチュアだった。“チャンコーン、チャンコーン、ドーイ、ドーイ”と長崎の精霊船は爆竹の音と花火の街を練り歩き、静かに西方浄土の海へと流れ行く。

写真は真・善・美の心象、事象をありのままに活写し、写す者、見る人の心に感動と生きる勇気・更なる知恵創出への挑戦欲を育てくれる。僕の5歳時の原爆体験は、B-29から落とされ、白いパラシュートに吊り下げられた黒い物体(原爆ゾンデ)の目撃、時間差のピカドンの白熱と爆風のずしりとした体感、恐怖のどん底で“帰りたい！帰りたい！”と母親の母胎(羊水)への回帰を訴え、母の懷で嗚咽した。爆心地から半日歩きの山越えで焼けただけの白衣の若い看護婦は、疲れ果て髪乱れ目はうつろ、我が家の前で“水をください！”と。あの声なき声が今も耳朶に残る。母親が井戸から汲み上げたつるべの水に口をつけたまま息絶えた。あの時の惨状を再現する“石の記憶展”を戦後60周年を越えて今年、長崎で開催する(主催：東京大学総合研究博物館・読売新聞西社・長崎市、期間：5月29日-6月30日、場所：長崎原爆資料館)。当時の大学教授が撮影した35mmコダックフィルムと被爆直後の長崎、広島の惨状踏査の貴重な記録写真、採取された石の展示である。60年間、東大の地下倉庫に眠っていた数々の石の証言、3年前、本郷の東大博物館で見た衝撃の“石の記憶展”を関係者のご支援でやっと長崎開催へござ

つけた。実行委員長の大役を仰せつかり、言の葉なき写真と沈黙の石の数々にじっと目と心を開きたい。

今やデジタル時代。大画面オーロラビジョンへもデジタルコンテンツとしての写欲と映像演出、感動表現に、今なお挑戦、悪戦苦闘を楽しんでいます。

香港競馬場では横70mの大画面(ギネス認定取得)にあの馬体の華麗な躍動感とジョッキーの多彩な雄姿を、米国ラスベガスでは円形舞台装置として横30mのLED大画面に歌姫シリーズ・ディオンの妖艶な美女を世界の歴史と景観を背景にデジタル演出中である。

この秋には出島(呼吸する長崎県美術館)からデジタル映像が大画面アートビジョンから国内外に発信される。観光と環境をテーマとした“HerArt 2006 Nagasaki-長崎水辺の映画祭”はいま、(1)携帯芸術部門=Mobile Art:テーマ“KEITAI”(2)環境芸術部門=Eco Art:テーマ“LOHAS”の両部門で全国公募中である。運営アドバイザーの一人として映像演出のイベントノウハウ創出に挑戦中であります。会員皆様のご参加とご支援、ご指導をお願い申し上げます。E-mail: info@heart-nagasaki.jp

第3回デジタルカメラ研究会 撮影会/見学会レポート

昨年11月28日、新宿で第3回デジタルカメラ研究会が実施されました。当日は、新宿中央公園での撮影会とエプソン・ショールームの見学会を組み合わせ、撮影した写真をプリントアウトするまでのフルコースでした。撮影会では、はじめに林会員からカメラと撮影の基本的な解説があり、参加者は思い思いの被写体に取り組みました。新宿中央公園は紅葉の盛りで、秋の柔らかな日ざしのもと、約1時間の撮影を楽しみました。

そのあと、タクシーに分乗して副都心にあるエプソンのショールームへ向かいました。プリンターの製品紹介と使い方の説明を受け、参加者全員が自身の操作でプリントを作りました。当日の参加者は会員7名、一般8名でした。

(豊田)

新入会員の紹介

大島勝彦(おおはたかつひこ)

写真歴25年。ドキュメンタリーや商業ジャンルの撮影、学生の指導(デザイン)に従事。興味のある分野は、文化遺産、色彩、写真史、写真と絵画の融合(ミックスド・メディア)、旅行など。日本広告写真家協会会員、日本グラフィックデザイナー協会会員。

編集担当より

今号では、川村会員からRPS入会時の体験と実情のレポート、ならびに日本支部に対する期待を披露いただきました。また、宮田会員には、稀有な体験を執筆いただきました。日本支部創立10周年を迎え、会が目ざす方向や発



エプソン・ショールーム前での記念撮影



ショールーム見学

展について相互に議論したいと思います。ニュースレターへの寄稿や、イベントへの参加、また活性化への企画などをお寄せください。(豊田)